

近世女性向け版本における挿し絵の研究 庭の植物を中心に

磯部 知秀

挿し絵とは、雑誌・書物などの本文に挿入された、記事に関係のある絵である。ただし、江戸時代の版本、特に往来物と称されるものの挿し絵は、必ずしも記事とは直接関係のないものもある。

日本文学においては、平安時代から文学作品を視覚化した絵画が製作されており、現代では児童文学などの低年齢層向けの書物などの挿し絵に使われている。このような挿し絵の重要性から、「徒然草」や「源氏物語」などある特定の物語や書物などについての挿し絵の研究は以前からなされていた。また、江戸時代の植物や庭園などの研究も進んでいる。しかし、挿し絵の植物に関する研究は皆無であり、全く研究が進んでいないのが現状である。

本研究では、『江戸時代女性文庫』に描かれている挿し絵の植物を調査することによって当時、庭に描かれている植物の挿し絵が近世女性向け版本においてどのような意味合いをもっていたのかを明らかにすることを目的とする。『江戸時代女性文庫』とは1～100巻まで存在し、江戸時代の女性や生活文化に関わる多くの文献をあらゆる分野から収録した初の影印資料である。具体的な研究方法としては、『江戸時代女性文庫』に描かれている挿し絵の植物の種類や、数、描かれている場所などのデータを取り、そのデータをもとに、内容の分析、比較などを行った。

内容を分析した結果、『江戸時代女性文庫』には挿し絵が5196点あり、その内植物が登場した挿し絵は計2241点であることが分かった。作品中に描かれている挿し絵の43%に植物の挿絵があり、植物と挿し絵には密接な関係があった。具体的に植物名が判断できたものは、38種類であり、松、梅、桜などの樹木が描かれている割合が多いことがわかった。しかし、版本の庭の挿し絵に注目してみると、松などはあまり描かれていないことが分かった。確かにこのような植物は作品全体に登場する絶対数が多いので、庭に登場する回数も他の植物と比較すると多くなるが、全体の植物数の内の庭に出てくる植物の割合を考えると松は一番ではなくなる。蘭と梅がそれぞれ80%、49%であるのに対して、松や紅葉はそれぞれ27%、25%となる。このことから、庭に描かれやすい植物、庭以外の場所に描かれやすい植物があることが分かった。

今後は庭以外のいろいろな場所を検証して、どの植物がどの場所に描かれやすいのかを、調査していく必要がある。

(指導教員 綿抜豊昭)